

南ヴェトナム解放民族戦線

HEMMI, Shigeo / ヘンミ, シゲオ / 逸見, 重雄

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

11

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

50

(発行年 / Year)

1964-11-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00017646>

南ヴェイエトナム解放民族戦線

(註1)

逸見重雄

まえがき

- 一、アメリカ帝国主義の干渉とゴードイン・デイエムの登場
 - 二、ゴードイン・デイエム政権下の南ヴェイエトナム
 - 三、南ヴェイエトナム人民の闘争
 - 四、南ヴェイエトナム解放民族戦線の成立
 - 五、南ヴェイエトナム解放民族戦線指導下の民族闘争
- A―政治闘争
- B―武装闘争
- むすび

まえがき

私は一九六一年七月ヴェイエトナム民主共和国首都ハノイを訪ねた。⁽²⁾ ヴイエトナム平和擁護委員会の招きに応じ、日本ヴェイエトナム友好協会の代表の資格で、七月二十日のジュネーブ協定成立第七周年記念の大集会に出席するた

南ヴェイエトナム解放民族戦線

めであった。

一九六一年は、ヴェトナム民主共和国政府Ⅱ祖国戦線政府が社会主義建設五ヵ年計画⁽³⁾実施第一年度を迎えた年であったが、この年の前半に隣国ラオスで、左右両派の間に武力衝突が起り、私共が羽田を出発する前、日本の商業新聞で、左派スファーンボン殿下の軍隊には、ヴェトナム民主共和国の軍隊が投入されているという噂が流されていた。

だから私は、この機会に、一つには右の噂さの真偽を確かめたいとの考えをもち、二つには社会主義建設の実施状況を具に見学したいとの望みをもって北ヴェトナムを訪れたのである。

ところで私共がこの眼でみたヴェトナム民主共和国の実状は、予想通り、安泰そのものであった。平和が回復して七年、この国はホーチミン⁽⁴⁾主席の指導の下に、人民の祖国戦線への結成は、美事にその実をあげ、何よりもジュネーブ協定を固く守り、着々と社会主義へ向って前進した。ジュネーブ協定では、他国への軍事干渉と他国からの軍事干渉を固く禁じており、同時に如何なる軍事同盟にも参加しないことが約束されている。いわば積極的中立主義が擁護されている。だから、ラオスとカンボジャ⁽⁵⁾の存立の基礎はここにあるわけであって、ヴェトナム民主共和国がアメリカ帝国主義の向うをはって、ラオスに軍事干渉を行うということは、全くありえないことであると確めた。

私共を迎えたヴェトナム平和擁護委員会の人々が、ヴェトナム民主共和国の政治・経済、社会、文化の各分野にわたって、行届いた説明をされ、実地見学の機会を与えられたことは、久しくヴェトナム研究をつづけて来た私にとって、極めて有意義であったことはいままでもない。だが、それ以上に有意義であったことは、北ヴェエ

トナムに入つて南ヴェトナムの実情を知りえたことである。

ヴェトナム平和擁護委員会は、私共のために、態々、南ヴェトナム実情報告会を組織され、専門家の報告があつてから、私共のいろいろの質問について解答を与えられた。その上、私共のハノイ入りの三週間ほど前に、南ヴェトナムから、十七度の軍事境界線を越えてハノイ近くまで飛来し、民主共和国の高射砲で撃墜されたスパイ機（C-47）の残骸——ハノイ市近郊で市民に展示していた——を見せて貰い、また、ゴージェイン・ディエム政府の残忍極まる拷問で、全身に三十余箇所の傷をうけ、乳房をえぐられた少女——この少女は、半死半生のまま路傍に棄てられたあつたのを、南ヴェトナム解放民族戦線加盟の一農夫に救出され、後に、北ヴェトナムへ送り届けられ、北ヴェトナムでもまだ入院生活をつづけているということであつた——に面接を許された。日本出発前にも、ゴ政府の人民弾圧の激しさやゴ軍特務の北部潜入のことは耳にしていたことではあるが、私共は、計らずもその実物教育をうけた次第である。

南ヴェトナム解放民族戦線は、私共のハノイ訪問の前年すなわち一九六〇年の十二月二十日に成立している。だから私共がハノイ訪問の時は、これがまだ半年余りの齢をもつ幼子である筈であるのに、この時既に南ヴェトナムの三分の二を解放し、北ヴェトナムの祖国戦線とラジオを通じて秘密交信するほどの成長を遂げていた。

米ルゴ独裁政府が、その成立の当初から、「ヴェイエト・コン」⁽⁶⁾の名において、警察的、軍事的、掃蕩作戦をもつて、その絶滅をはかった「ヴェイエト・コン」は、彼等の意図に反して、日に日に大きくなった。「ヴェイエト・コン」とは、彼等のねつ造した南ヴェトナム民族解放戦線の異名に外ならない。

南ヴェトナム民族解放戦線は、一九四〇年、日本帝国主義のインドシナへの軍事侵略と時を同じくして、ホー

チミンが長い亡命生活から初めて祖国へ潜入して、ヴェトナム民族解放運動へ新方向を与えた「ヴェトナム・ミン戦線」(越ヴェトナム・ドンクランフ・ドンミン南独立同盟)と類似の民族統一戦線の組織のことであって、北部の祖国戦線とは別箇の組織である。

元来ヴェトナム人は一つの民族であるから、一つの国家をもつべきものであって、今日のように、南北に分断されていることは不自然であり、ヴェトナム人民の希望するところではない。民族の分割支配は、植民地主義者の常套手段であって、かつてヴェトナム民族は、フランスの植民地主義者によって、バッキ(フランス側の呼称、トンキン)、チュオンキ(同、アンナン)、ナムキ(同、コーチンシナ)の三つに分割支配された。しかし、民族解放運動は、全ヴェトナムの規模で闘われてきたし、ホーチミンが八月革命を経て、一九四五年九月二日、ハノイでヴェトナム民主共和国の樹立を宣言したときには、南・中・北すべての人民がその手に収められていたし、一九四六年から五四年にいたる抵抗戦争の間も、北ヴェトナムの人民だけがこれに加わったのではなかった。

だから、一九五四年に結ばれたジュネーブ協定では十七度線をもって暫定的軍事境界線と定め、当時の当事者、フランス軍とその従者バオダイ軍とヴェトナム民主共和国人民軍との間で話し合い、一九五六年すなわち二カ年の後総選挙を行って、南北を統一することを協定している。しかるにフランスに代って南ヴェトナムの新植民地主義的支配を意図したアメリカ合衆国は、その従者ゴードイン・ディエムを使って、ヴェトナム共和国をつくらせ、ジュネーブ協定の定める南北統一を極力妨害しつづけ、十七度線を固定化した。そこで、南ヴェトナムの人民がアメリカ帝国主義とその従者ゴードイン・ディエムの政権を打倒して、民主民族連合政府を樹立して独立解放の実をあげようとして出来たのがこの南ヴェトナム解放民族戦線である。こう見てくると、ヴェトナムに二つの戦線が出来たのは五四年以後ヴェトナム人民が置かれた特殊事情にあることがわかるし、北ヴェトナムの人

民が南ヴェトナム解放民族戦線の勝利に期待をかけ、南ヴェトナムの人民が北ヴェトナム祖国戦線政府の社会主義建設の邁進に励まされていることも肯かれることである。いわば、南ヴェトナム解放民族戦線は、一九五四年ヴェトナムで中断された民主民族革命を十七度線の南で完遂するために生れたヴェトナムの民主民族革命の相続人であって、南ベトナムで解放の実を遂げた後には、北ヴェトナムの政府との平和的統一を展望する南ヴェトナムにおける民族統一戦線のことなのである。

私は、本誌第十四号(社会学部創立十周年記念特集(上))に「社会主義への過渡期のベトナム経済」と題する小稿をよせた。その「まえがき」で「ヴェトナム経済」の題下に北ヴェトナムだけを扱うのは不充分であると断っておいた。ヴェトナム問題の解明には南ヴェトナムの問題こそ肝要であるとその時考えていたからである。本稿では、主として政治問題を扱おうから、これが前稿のつゞきということにはならないけれども、筆者は本稿においてヴェトナム問題理解のため、少くとも後篇の役割を果させたいと思う。

(註1) (イ)「ヴェトナム」は Viet-Nam の日本読である。日本では数年前からこれを「ベトナム」と読んでいる。私も、前論文その他でベトナムの言葉を用いたが、学術用語としては発音通りにした方が適正であるように考えられるので、本稿では「ヴェトナム」と改めることにした。(ロ)南ヴェトナム解放民族戦線はヴェトナム語 *Mant Nan toc giai phong* *minam Viet-nam* の日本訳である。日本では、これを南ヴェトナム民族解放戦線と訳している向もあるが、両者は意味あいが一寸違うように感じられるだけでなく、民族戦線とか民族統一戦線とかいう言葉が単独に用いられて差支えないと考えられるから、本稿では、ヴェトナム語通りにした。

(註2) ヴェトナム民主共和国は一九四五年の九月二日に成立した。だから九月二日が独立記念日として毎年祝福されている。この時は、ヴェトナム戦線政府が樹立され、ヴェトナム戦線を指導したインドシナ共産党は、この民主民族連合政府の一翼に過ぎなかった。このヴェトナム・ミン戦線は、一九四六―五四年の抵抗戦争の間に、いつそう幅を拡げて、リ

エン・ヴェトナム戦線に転身し、これを指導するインドシナ共産党は抵抗戦争最中の五一年第二回全国大会でヴェトナム労働党と改名した。この戦線政府が非公然な存在をつづけ、フランスの占領区を次々と解放し、解放区を拡げながら、遂に五年のディエンビエンフーの大勝利を齎したのである。五四年のジュネーブ会議で、ヴェトナム民主共和国は、社会主義諸国についてはいふまでもなく、いくつかの資本主義の諸国にもその独立を認められ、再び公然たる存在となつたけれども、ジュネーブ協定の定めるところに従つて、十七度線の北でしか戦線の活動をつづけることが出来なくなつたので、リエン・ヴェトナム戦線は祖国戦線に転身し、民主共和国は祖国戦線の政府として新しい任務につき、なお民主民族連合政府の性格を保持しつづけている。

(註3) 一九六〇年に開かれたヴェトナム労働党第三回全国大会において策定された社会主義建設五カ年計画は、六一年から祖国戦線政府の手によつて実行に移された。この政府は、それまでに民主革命の中心課題である農業革命を完遂し、ついで、民主的再建から改造への各準備段階を経て六一年から社会主義生産関係の導入へと順を追うて下部構造を変えて来る。拙稿「社会主義への過渡期のヴェトナム経済」(『社会労働研究』第十四号(上))は、このところを取扱つたものであるから参照していただきたい。これとは対蹠的に、南ヴェトナムでは、「抵抗戦争」中に、解放された地区で行われた農業革命の取消し、旧地主や買弁ブルジョアジーの農民への復讐が行われ、これを支持するゴ政府の似而非農業改革が南ヴェトナム全土において進行し、いたるところで、地主対農民の紛争が捲き起こされた。

(註4) ホーチミンは、ヴェトナム民主民族革命の最高の指導者で、ヴェトナム民主共和国樹立後、引つゞき主席の地位にある。アジアでは最古参のマルクスレーニン主義者で、マルクス主義の立場からヴェトナム民族運動を指導し、一九三〇年にインドシナ共産党を作つてから、ヴェトナム民族解放運動を労働者階級の指導下に収めて八月革命を勝利に導いた偉大な革命家である。北ヴェトナムの革命的伝統のある農村の貧しい家に生れたが、父は宮廷詩人で学識の高い人であつた。ホーチミンは、二〇代にしてヴェトナムを離れ一九四〇年まで海外生活をし、フランス、ソビエト、中国の各共産党と深い関係をもつた。一九二〇年、フランス共産党成立の時、フランス共産党に加盟してから、一九四〇年祖国に潜入するまで凡そ二〇年ヴェトナム民族解放運動を外から指導している。だから、彼の全生涯はプロレタリア革命運動に捧げられてゐるわけで、彼の研究を離れてヴェトナムの民族解放運動、労働運動は理解出来ない。国際労働運動史上にも見逃せない人物である。ホーチミンは今年七十四才の高齢であり独身である。

(註5) ラオス、カンボジャ、ヴェトナムは今日、「インドシナ三国」と呼ばれている。今世紀の初め頃に、フランス植民地主義者は、この三国の占領を終り、仏領インドシナ連邦(仏印)をつくつた。この時ヴェトナムは三つに分割され、トンキン半保護領、アンナン保護領、コーチン・シナ直轄植民地、カンボジャ保護領、ラオス半保護領の五邦を総督が統轄する政治体制を樹立した。保護領には、それぞれ旧王朝を残し、形式だけ、宮廷政府をつくらせ、これを総督政府に従属させ、フランスはこれを利用した。この王朝は、カンボジャ、ラオスに今日まで残り、一九五四年ジュネーブ協定成立後も、この両国の支配者となつている。フランスはヴェトナムの最後の阮朝^{グエン}を残し、その最後の皇帝バオ・ダイ帝をジュネーブ協定まで利用しつづけた。ゴードイン・デイムは、このバオダイ宮廷府の代々の頭官の息子であり、また一度は三十二才の若さでこの大臣にもなつた。ジュネーブ協定成立以後、アメリカのさしがねで、いったんバオダイ政府(ベトナム国)の総理となつたが、五六年、南ヴェトナムで行われた似而非総選挙の結果、大統領となり、バオ・ダイ勢力を駆逐して、南ヴェトナムに、「ヴェトナム共和国」(米・ゴ政権)を樹立した。バオダイは現在南仏に亡命している。

(註6) ヴィエト・ホン(Viet-Con)とは、本来は、ヴェトナム共産党の略称であるが、元来ヴェトナム共産党なるものは存在していない。かつて存在したインドシナ共産党は一九五一年以来ヴィエトナム労働党と改称されている。それだのにかつてフランス帝国主義者が「越盟」^{ヴィエト・ミン}(Viet-minh)をヴィエト・コンと同じような意味に解釈してこれに無差別弾圧を加えたと同じように、今日では北から入つて来て反政府活動をする不法分子Ⅱ「火付け盗賊の類」^{ダグイ}といった憎悪を含めた意味で米Ⅱゴ政府が掃蕩作戦の相手方に附した呼称である。「共産ゲリラ」なども同じような意味に使われている。しかし、ヴィエト・コンがそんなゲリラの集団でないことを本稿は明らかにしてゆくだろう。

一 アメリカ帝国主義の干渉とゴードイン・デイムの登場

一九四六―五四年の抵抗戦争を闘い抜いたヴェトナム人民は、五四年のデイエン・ビエンフーの戦闘に勝利を収め、フランス帝国主義の再侵略にとどめをさした。一九五四年七月二十日に締結されたジュネーブ協定⁽⁷⁾は関係十カ国の参加のもとに、第一には平和の回復とヴェトナムにおける新しい戦争をふせぐこと、第二にはヴィエト

ナム人民の民族的権利を尊重する立前から、ヴェトナムにおける政治問題を解決すること。この二つの趣旨で締結されたのである。

ジュネーブ協定では第一のゴールに到達するため、次のような手段を採ることを決定した。

第一、交戦中の両軍を引離すため、十七度線に暫定的軍事境界線と非軍事地帯を設けること（ヴェトナムにおける停戦協約第一、六、七条）。

第二、軍隊、軍事要員、武器、弾薬を増強することを禁止すること（ヴェトナムにおける停戦に関するジュネーブ協定第十六、十七条並びにジュネーブ会議最終宣言第四項）。

第三、双方が新しい軍事基地を設定しないこと及び如何なる軍事同盟にも加盟しないこと（停戦条約第十八条、十九条、最終宣言第五項）。

また、第二のゴール到達するために次のことがきめられた。

第一、ヴェトナムにおける政治問題は、ヴェトナムの独立、主権、統一及び領土保全を尊重する基礎の上に解決されるだろう（最終宣言二、十二項）。

第二、ヴェトナムは、協定調印後、二カ年のうちに全国で行われる自由な総選挙によって統一されるであろう（停戦協定第十四条の及び最終宣言第六、七項）。

第三、ジュネーブ協定の履行は、協定署名者並びにその後継者たちの義務である（停戦協定第二十七条、四三条）。

第四、戦争中反対側と協力していた個人及び組織も、民主的自由を保障されるであろう（協定第十四条のC及び最終宣言九項）。

このジュネーブ協定は、一方、ヴィエトナム民主共和国の人民軍と他方フランス政府を代表するフランス連合の軍隊並にフランス指揮下の土着軍との間に調印された停戦協定と、九つの参加国によって起草されたジュネーブ協定最終宣言との二つを含んでいる。

バオダイ政府——その当時の総理はゴードイン・ディエム——は、フランス政府が合法的代表者であったという極く簡単な理由からヴィエトナム停戦協定に正当な権利が与えられなかった。

それは兎も角として、協定の文章では、十七度の暫定的軍事境界線は、政治的または領土的境界線と見做されない。一九五六年七月二十日ときめられた自由総選挙で、それが取除かれるまで、十七度線の北部はヴィエトナム民主共和国政府に委され、南部はフランス連合軍隊に臨時行政をまかされたに過ぎないのである。だから、北ヴィエトナム及び南ヴィエトナムという言葉は、両交戦軍の再結集地帯に附した地理的名称に過ぎないのであって、「ヴィエトナム共和国」(南ヴィエトナム)はジュネーブ協定調印以前には、分割された国として話題にさえのぼらなかった。全人民によって選ばれた合法的権力は、抵抗戦争以前から存在したディエンビエンフーでの勝利者、ヴィエトナム民主共和国たゞ一つであった。

しかるに、アメリカ帝国主義者たちは、この協定に不満であり、協定の履行を妨害しようと目論んだ。ジュネーブ会議出席のアメリカ代表ベデル・スミスが合衆国政府は、協定の履行に違反して力と力の脅威を用いないと諒解したと述べた恰度その時、アイゼンハワーは、アメリカ合衆国は、協定に調印しなかったからそれによって拘束されないと言言した。

それから、十七度線の南部ではどういうことが行われたか。

第一に行われたことは南ヴェトナムからフランスを駆逐することであり、第二のそれは、あらゆる犠牲を払ってヴェトナムの統一を妨げることであり、第三のそれは、南ヴェトナムに鞏固な基地を確保することであり、第四に、すべて叙上の手段は、名目上、反共産主義闘争という「正当な理由」で指令されることを声明することであった。

若し此の案が達成されたら、アメリカは、南ヴェトナムを東南アジアの心臓部における稜堡に変えることが出来ることはいわずもがなで、アメリカの売れない商品のための一大販売市場、自然資源と安い労働力をもち、投資にも適する豊富な地帯を手に入れることになる。一言にしていえば、合衆国は、ヴェトナム出身のアメリカ追従者を通じて、新型植民地を支配し、人民中国の南の理想的軍事基地を利用することになる。信頼しうる人物が探し出されねばならない。

此の人物はゴードイン・ディエムであった。彼の生涯は、フランス植民地主義者等の有能な官人^{マンダリン}として出発し、日本ファシストどもの情報係となり、最後に、彼の同胞が侵略に対して新しく武器をとった時アメリカへ去り、アメリカの代弁者としての訓練を受けた。

アメリカ合衆国は、フランスを駆逐するのに大きな困難に出会わなかった。一九五五年初め、バオダイ政府の総理だったディエムは、カオダイ、ホアハオ及びピンクスイエンという政治的宗教的団体⁽⁸⁾——その指導者たちは親仏であった——に対して軍事的攻撃を加え、バオダイがフランスにいつている間に、バオダイの打倒を宣言した。

他方、アメリカ合衆国は、フランス遠征軍の代りにディエムの軍隊を養成し、一九五六年にフランス軍を本国へ帰還させた。フランス政府は、債務者としての弱い立場⁽⁹⁾におかれ、彼の土着人従者たちの軍勢の分裂に当面し、また、ア

ルジェリア戦争で大困難を嘗めていたので、ジュネーブ協定履行の一切の責任を回避して、黙って合衆国の命令を遂行した。かくて、軍隊再結集の完了後一カ年にしてアメリカは、サイゴンにおけるフランスに完全にとって代った。アメリカにとって、より困難でより複雑であったのは、ヴェトナムの分割をつぶしてゆくことであった。そのことは、ジュネーブ協定の侵犯であり、同時に人民の感情と反対の方向に進むことであり、余りにも多くの分野にかかわることであったからである。

政治的見地から、なすべき第一のことは、一九四五年以来存在するヴェトナム民主共和国に対立する人為的国家を選ぶことであった。ディエムは、合衆国顧問に助けられ、バオダイを転覆した直後の一九五五年、偽瞞的選挙を組織し、ジュネーブ協定に違反して「ヴェトナム共和国」を創設した。この国家は、大統領、国民議会、政府、軍隊等一切の必要なものを備えている。この政府は、分割主義者の政府で、アメリカ合衆国への従属を卒直に述べ、フランス連合の軍隊の後継者であることを否定することによってジュネーブ協定をも否認する。

ゴードイン・ディエムは、この政府の非合法的地位を防衛するため、ジュネーブ協定で約定された民族統一のための総選挙を組織する相談会を開いて、両地帯間の正常な関係を再建することについてのヴェトナム民主共和国政府の一切の建設的提案を拒絶するため、合衆国の援助で、急いで近代の軍隊を創設し、サイゴンのラジオを通じて、「北進」して力でヴェトナムを統一するとおどしをかけた。

農業地帯を背景とする一、四〇〇万の人民は、¹⁰⁾アメリカ合衆国の干渉を退けて、ウォール街に抗議することのできる近代の軍隊をつくることも養うこともできない。だから、合衆国の「援助」を求める。合衆国に対して数えきれぬ重苦しい政治的・経済的譲歩が与えられねばならず、税金を通しての人民の搾取は、同様な運命の下におかれ

た他国の場合のように、強められねばならない。

アメリカ合衆国はまた、ゴードイン・ディエムに対して支援の手を差しのべた。この支援は当時はまだ鞏固なものではなかったが、当時から、東南アジアの平和を脅かすものであった。ジュネーブ協定が調印されて六週間にして合衆国はマニラに侵略的「東南アジア条約機構」(S・E・A・T・O)をつくった。東南アジアの指導国がこれをボイコットしたにもかかわらず、この機構は、勝手に東南アジアに配置され、若干の国がその軍事的「保護」下におかれた。南ヴェトナムもその例外ではありえない。たゞ、当領を公然と東南アジア条約機構に加盟させることはできないから、オブザーバーたちが送られて、SEATOのブロック会議からの指図をうけている。ディエムは、彼の同族——台湾の蔣介石や、南朝鮮の傀儡と著しく接近した。しかし、これらの生ける屍たちは、ジュネーブ協定の手前、他国の問題に露骨に介入することは慎まなければならぬ。結局、合衆国は一九六一年にディエムと別の協約を結んで、南ヴェトナム人民に対して「宣戦布告なき戦争」——汚い戦争をしかけることになるのである。

(註7) ジュネーブ協定については、Le Van Chat:—The Undeclared War in South Viet Nam. 1962, Ed-Hanoi, Foreign Languages Publishing House. の附録(1)参照。

(註8) Cao Dai, Hoa Hao, Binh Xuyen は、いずれもフランス統治下ヴェトナムに生れた新興宗教の団体である。教主はヴェトナム人で、南ヴェトナムでは、仏教、カトリック教と並んで、農村人口を抑え、抵抗戦争中にバオダイ政府を支持して反動的役割を演じた。南ヴェトナムでは、伝統的宗教は仏教と儒教であるが、フランスが八十年間の支配をつづけた間に、カトリックが持込まれ、南ヴェトナムでは、人口の一〇%位がこれに改宗したといわれている。ゴードイン・ディエムはカトリック信者で、彼の一族もカトリック信者が多い。彼のつくったヴェトナム共和国憲法は、このカトリック全体主義の精神で作られ、南ヴェトナムの大学の講義者にはカトリック神父を用い、神父たちは士官や官吏のイデオロギーを養成している。この共和国の官吏は、自己の昇進のため、カトリックに改宗したものが多いいわれる。カトリック

教会は、南ヴェトナムの革命運動弾圧のため、帝国主義者及びゴードイン・ディエムに存分に利用された。これについては、カオリヴァンルウン（加茂徳治、真保潤一郎抄訳）「南ヴェトナム革命運動弾圧のためカトリック教会利用の陰謀」（『歴史評論』一九六三年十月号）を参照されたい。

(註9) アメリカ帝国主義者のヴェトナム干渉は、一九四六―五四年のヴェトナム「抵抗戦争」の間に、フランス帝国主義者の侵略戦争を救けたところに起因している。そしてフランス遠征軍が敗北した後に露骨になって来る。「はじめは、帝国主義者間の当然のこととしての金と武器の援助であつたところが、次第にフランスの傭兵たちに合衆国がすべてのものを供給して、合衆国による傭兵の増援となる。それは武器と金から計画へと変り、その計画が合衆国の將軍達によって統制された。一九五四年ワシントンはインドシナにおけるフランス遠征軍の事実上のボスとなつていた。ナヴァール作戦はペンタゴンで起案され、その遂行のためのあらゆる便宜は合衆国の保障するところであつた。それゆえに、ディエンビエンフーの敗北は、たゞぱりに衝撃をあたえただけでなくワシントンにも衝撃をあたえたのである。」（前出 *The Undeclared War in South Viet Nam* p. 23）例えば一九五〇年から一九五四年へかけて、ワシントンが血なまぐさい戦争に二、六六〇百万ドル（すなわち経済、技術援助の一七三六・三百万ピアストル）を投じ、それは次のように分配されたことは一般に知られている。

一九五二年、二一八、〇〇〇百万フラン。即ちインドシナ戦争全戦費の三五％。

一九五三年、二六六、〇〇〇百万フラン。即ちインドシナ戦争全戦費の四五％。

一九五四年、四二〇、〇〇〇百万フラン。即ち同上の七〇％。

(Tran Van Giau, *Le Van Chat:—The South Viet Nam Liberation National Front*, 1962, Ed. Foreign Languages Publishing house. Hanoi. p. 12)

(註10) 南ヴェトナム総人口については正確なところは分らないが、一九五五・六年頃は一、二〇〇万人と評価され、現在では一、四〇〇万人と評価されている。序でに、ヴェトナム全体では、約三、〇〇〇万人で、北ヴェトナムは一、六〇〇万人である。インドシナ三国を合わせた総人口の七〇％以上を占めるのがヴェトナム人であつて、南ヴェトナムの有職人口の八〇％以上が農村人口であることは、工業化の進んでいない南ヴェトナムでは、今でも変りないものと考えて差支えないだろう。

二一 ゴーディン・ディエム政権下の南ヴェトナム

アメリカ合衆国は、約一、四〇〇万の人口をもつ地域、アメリカ軍に代って死ぬであらう軍隊、東南アジアの価値ある軍事基地を手に入れるために、一九五四—六二年間に約二〇億ドル⁽¹¹⁾を費した。「援助」という言葉は、南ヴェトナムでは、現実に適応していない。「ヴェトナム共和国」は、誕生の時から合衆国によって支配され、合衆国の干渉がなかったら、ゴーディン・ディエムは、ニュージャシー（合衆国）の亡命先から帰って来なかったであろうし、ワシントンからの支持がなかったら、彼は乞食になっていたかもしれない。

ワシントンとサイゴンにとっては、援助の諸条件について協定することや帝国主義国と低開発国との間の不平等な関係において協定することが問題であったのではなくて、合衆国にとって最も有利な「援助」の手段と形態を見出すことが問題であった。だから、合衆国は南ヴェトナムに最も厳しい条件すなわち、南ヴェトナムを新植民地のモデルにかえるという条件を課したのである。

合衆国の援助は、組織的には二つの形態のもとに与えられた。即ち、

軍事援助——教練のための援助、防衛のための援助、武器援助を含む——と経済的並に技術的援助は、原則として相異なる機関⁽¹²⁾（M・A・A・GとC・A・T・Oとは軍事援助、U・S・O・Mは経済援助を取扱う。）によって扱われる。しかし、実際には、これら二種類の援助は互に密接に連結され共通の目標——あらゆる点で合衆国の地位を強化する。——に向けて相互に補足し合っている。

ディエムには苛酷な条件が課される。

第一の条件は、合衆国の戦争準備の一般政策、特にヴェトナムの国を分割する特殊政策を履行することである。この任務の遂行は、サイゴンの合衆国大使が統監する。だから、サイゴン政府は合衆国の政策を変更したり、これにたてついたりする権利をもたないわけである。

誓約を破った場合には、合衆国はその援助を断ち切るのではなくて、その信頼できる部下を変えるだけでこと足りる。他方、ディエムは合衆国の意志に反して行動しても得るところはない。合衆国なくば、彼は直ちに除外されるからである。これがヴェトナム人民がサイゴン政府を「米IIゴ政府」と呼ぶゆえんである。

全指導機関のなかには、計画化担当の合衆国の専門家、援助支出の専門家たちが配置されているから、統制は厳しい。地方でも、合衆国の他の専門家と同じ任務を遂行している。それとは別に、ワシントンは、正規にまた必要な場合にはいつでも、これらの政策の推進を監督し、また諸種の業務を管理するため個人または使節団を送る。

第二の条件は、援助の形態についてである。それはディエム政府の従属を確実にするためになされるのである。武器援助について、ワシントンは各種工場からそれを買ひ、直接に關係使節団に送り、顧問の資格をもつ合衆国士官等の指導する部隊に分配される。防衛援助は、商業化されている。それはディエムが、合衆国の余剰品の購売のためにだけ使用できるある額のドルを与えられていることを意味する。ディエム政府は、これ等の商品をサイゴンで売り、その売上高を軍事支出のため嚴重に保留される基金に供托する。経済的、技術的援助は、寧ろ小額（軍事援助の三分の一）で、政治的援助（農業セツルメントの創設、偽瞞的な農業改革）または、軍事的目的（戦略道路、海軍基地、空港等の構築）に役立てられる。合衆国は少しも南ヴェトナムの経済的、文化的、社会的開発には関心をもっていない。

かくして、ドルはディエムの手中には一瞬もとどまることなく流通するように、すべてが手配された。民族主権は殆んど存在していないに等しい。南ヴェトナムのピアストルはドル圏に結びつけられねばならない。合衆国商品について優先関税待遇をディエムは保障しなければならぬ。商品は、商談の後、アメリカの船舶に積荷されなければならぬ。運賃は市場運賃によるのではなく、アメリカの銀行に払込まれるのである。

このような特権は、ウォール・ストリートに大きな利潤を与える。武器や食糧の生産者から銀行家、船会社の支配人や両替商に至るまで、すべてが利潤を懐にする。南ヴェトナムは合衆国の農産物で「援助」される。輸入手量は、国防省の財政上の必要によってきめられ、人民の要求によってはきめられない。かくて、市場はいつもバランスを失っている。

だが、条件はどんなに厳しくとも、ディエムが私腹をこやすのが容易であることに注意を要する。彼は援助を増すため手をさしのべる毎に大きな利得をもつ。

支払に関する限り、ワシントンが支払うといっても、つまりは合衆国政府と合衆国の独占資本家に税金を支払わねばならないアメリカの人民が支払うのである。金はむしろ以前の植民地の官吏よりぜいたくな生活をしている合衆国の数千の顧問たちに分配される。最も多くの損失を蒙るのはヴェトナムの人民である。

既に貧困でおしのめされた人民の上に困窮が加わる。

先づ第一に、合衆国の条件により、南ヴェトナムは軍事施設、抑圧機関⁽¹³⁾をつくらねばならない。一九四六年から五四年まで——約九年間、自分の領土で激しい交戦が行われた——絶え間のない災害に苦しめられたヴェトナムの人民にとっては、重過ぎる条件である。しかるに、ディエムは国の財力のすべてを軍事目的のために費やす。

他方税金は生計費を圧迫する。合衆国の余剰商品の輸入は、貿易バランスの赤字を恒久化した。輸入は輸出のいつも四・五倍である。

若しある商品の輸入をきめるのが南ヴェトナムの人民の需要からではなくて、合衆国の売れない商品の現実条件からであるとしたら、情勢はいっそう重大である。住民の生活を改善するどころか、住民は貧困化するだけだ。それらの商品の大部分は人民の多数によって要求されない（自動車やその他ぜい沢品）。さもなくば、それらの商品の大部分は国内で生産されるものと競って有利である（砂糖、織物、小麦粉、野菜、煙草、牛乳等）。合衆国商品の優位は、多数の土着生産部門の死滅を意味する。民族ブルジョアジーの破産、労働者の大量失業を招来する。嘗てはインドシナの米倉の一つであった南ヴェトナムの現在の米と玉蜀黍の不足は、この状態を最もよく表わしている。

十七度線の南のヴェトナム人は、次のような苦境に立たされている。すなわち、彼等の活動はますます制限され、彼等の商品は合衆国の商品と競争が出来ない。且つ、彼等のポケットが空であるのに税金は年毎にかさみ、シヨール・ウインドーには合衆国の商品が氾濫している。多数の青年は悪漢やギャングに、少女は淫売婦に転身する。大平洋の向う側から輸入された好色本、新聞、フィルムが民族精神を腐敗させる。

デイエムは南ヴェトナム人民をこのような袋小路に追込むことによって、彼等を集中区や選抜攻撃隊の中へ易々と引抜いた。貧困化と墮落は南ヴェトナムの系統的軍事化の結果である。

デイエム一族と一握りの特権的仲買人を除いて、全ての人がこの気狂じみた政策で苦しめられている。農民は偽瞞的農業改革⁽¹⁴⁾によって何等の利益もえられず、赤貧洗うがときありさまとなった。以前、抵抗政府^{II}ホー政権によって彼等に分配された土地は、今では奪還されている。地代はかさんだ。しかも政府は地主——この階層はふく

れ上り権利は強化された——のため地代の徴集を保証する。労働者はフランスの下にあった時と同じ飢餓賃金をうけとり、増大する失業軍の存在により脅威される。一九五八年サイゴンで公にされた労働白書によっても、当時の完全失業者は四〇万人を超えた。一九六〇年にはその数が一五〇万人にのぼった。一九六一年は、労働年齢人口の五八%は失業者となっている。商業では、たゞ少数の買弁資本家——ディエムの義妹が、この階層の第一人者で、彼女は輸入品の分配を独占し、はかりしれない利潤を収めることができたが、大多数の商人はそれがために疲弊している。南ヴェトナムの小工業者は、彼等の企業へ合衆国の投資を受入れなければならないので、彼等の経営権を失うかまたは破産した。公務員や兵卒たちは、合衆国顧問等によって切りまわされているところから、不安を感じ、自尊心を傷つけられた。

叙上の理由から、ディエムは、合衆国から離れてはこの国で他に頼りうるものは誰ももっていないということがわかる。

経済的には、ディエムは最もおくれ最も反動的な地主のグループ——この二十世紀の半ばに封建的地主の特権を維持することを望んでいる——によって支持されている。それから、買弁資本家——⁽¹⁵⁾彼等は、輸出輸入でもうけ、ディエムの親米政策に同意する——がいる。しかし、これらの二つの社会的勢力は、組織の点でも、大きさの点でも、影響力の点でも、至って弱体である。

その上、最も逆行的で最も反動的地主——ゴードイン・ディエムを別にすれば——は、ディエムの弟のゴードイン・カン（五男）である。今一人の弟、ゴードイン・ニュー（四男）と彼の妻は、南ヴェトナムでは最大最強の買弁資本家である。つまり、経済的分野においてさえ、ディエムの家族独裁の支配は、彼の一般方針を認めている、

反動的階層をさえ満足させてはいない。だから、「民主主義の拡大」が、すべての人のために必要であるのではなく、ディエム家族と権力や利潤を分つことを望む人々のために急がれるのである。

税金については、南ヴェトナム人のそれぞれは、年齢別、性別を無視して、中央予算に年平均七〇〇ピアストル、地方予算に同一二〇ピアストルを支払わなければならない。それは米にして月二〇キロに相当する。毎月、各人は三日乃至五日賦役にゆくか、その代りに金を支払うかしなければならぬ。大統領は、人民の購買力が七〇% 方下落したことを認めなければならぬ、この社会悪が南ヴェトナムにあまねく拡がったという理由で、乞食反対の団体の創設を強行する。驚くべき取締りが発表された。クアンチ省で、飢えを訴える人々は、集中区へ送られる。他の多くの場所で、人民は、彼等が街へ行くときには、綺麗な服装をしなければならぬ。さもなければ彼等は罰金を課されるのである。

南ヴェトナムの危機の今一つの局面は、ドル対ピアストルの価値切下げで、これがドルそのものの下落しつつある中で行われたことである。一九五五年には、一ドル当り三五ピアストルのレートは、一九六〇年には七四ピアストルときめられた。このように、南ヴェトナムの対ドルピアストル切下は一〇%方高まる。

私的投資について見れば、一方には、ディエムは、アメリカ独占資本家に優先権を与えるためベストをつくしたことになる、他方では投資（約一三〇万ドル）——主に為替手形やサーヴィス業に投ぜられた——は、手取り早い利潤を獲得したことになる。

要約すれば、合衆国IIディエムの南ヴェトナム軍事化政策は、経済的金融的分野で、サイゴン政府を合衆国へ完全に従属させた。日本やフランスのような資本主義国は、サイゴンへ若干の商品を輸出することに成功したとし

たら、それは、彼等もまた合衆国から援助をうけているように「三角関係援助」の適用を通じてである。利潤の大部分は、つまりは、ウォール街に流れるのである。叙上の政策の結果は南ヴェイエトナム人民の急速な貧困化に外ならない。

生産は停滞し、少しばかり手に入れた金は武器購入のための税金によって消し飛ばされる。何ほどの消費財をかうことはアメリカの独占会社をもうけさせることである。合衆国の援助は、南ヴェイエトナムの人民を「科学的に」搾取する方法である。

合衆国の援助は、他方、法外な軍事化、盗賊的作戦に通ずる。そして、そのことが毎日毎日生命と財産との重大な損失を惹き起しているのである。

(註11) 一九五四年平和回復以後のアメリカの対南ヴェイエトナム援助額は左表の通りである。

年 度	防 衛 費 単位一〇〇万ドル	経 済 援 助	引 揚 者 援 助	年 合 計
一九五五	二三七・八	二九・七	五五・八	三二三・三
一九五六	一一〇・八	五四・三	三七・二	二〇二・三
一九五七	一七三・三	八五・〇		二五八・三
一九五八	一四〇・五	五〇・〇		一九〇・五
一九五九	一四〇・六	四四・四		一八五・〇
一九六〇	一三四・〇	三〇・〇		一六四・〇
一九六一	一九六・〇	二〇・〇		二一六・〇
一九六二	二〇〇・〇	二〇・〇		四〇〇・〇
合 計	一三三三・〇	五一三・四	九三・〇	一九三九・四

なお、一九五六年、一九六〇年の南ヴィエトナムの国家予算の中で軍事費がどんなに大きいかを示そう。一九五五年から五八年までの総支出は南ヴィエトナムのピアストルで五八、五六九百万ピアストルであった。その中で、国防費は三〇、二三一百万ピアストルで、総支出の五一・六％である。この軍事支出には戦略道路、「農業都市」——“Agrovilles”は高原地帯のような人口の稀薄な地区の軍隊に食糧や労働力を供給するため、人民をその中へ集めているキャンプの名称——警察隊の建設のための割当を含めていない。軍事化は一九五九年以後強化された。証拠として次表の数字。

	一九五九		一九六〇	
	支 (一〇〇万比弗)	出 百分比	支 (一〇〇万比弗)	出 百分比
防衛基金	六一七三		三七一	
秘密防衛基金			一〇四六	
農村防衛基金	一一九二		一三〇五	
保安費	一一四六		四〇〇	
戦略道路・空港	三五〇			
農業都市費		五八％	八九〇九	六〇・二％
合計	八八六一			

(Le Van Chat:—The undeclared War in South Viet Nam. 1962, Hanoi. p. 64)

なお、真保潤一郎「南ベトナムの経済状態」(新日本出版社「経済」第七号)参照。

(註12) M・A・A・Gは Military Aid Advisory Group の略称で即ち「アメリカ軍事援助顧問団」、C・A・T・Oは Combat Army Training Organization の略称で、「戦闘軍訓練組織」、U・S・O・Mは United States Overseas Mission の略称で、「合衆国海外派遣使節団」とでも訳せば適當か？ M・A・A・Gは南ヴィエトナムにおける最高の司令部となっているが、既にフランスの遠征軍の中にあつたものが、一九五六年にフランス軍に代り、五七年には新しい諸機関を設け、その数は五六年には一、六〇〇人と見積られたが、年々増加し、最近では一五、〇〇〇人と評価されている。

(註13) 一九六一年ヴィエトナム平和委員会から出された July 20th (七月二十日)というパンフレットによれば、一九六一

南ヴィエトナム解放民族戦線

年のM.A.G.要員は約四〇〇〇〇人。米・ゴ政府の軍事勢力は、正規軍（米仏の武器で装備され師団軍団に編入された兵力）一五〇、〇〇〇人、在郷軍（重兵器で装備された）六〇、〇〇〇人、警察部隊（軍隊式に編成された）一〇〇、〇〇〇人、以上の常備軍計三五五、〇〇〇人、予備役一一五、〇〇〇人、総計四七〇、〇〇〇人。更に、過去七カ年の軍需品及び武器、戦争資材の導入は、飛行機二五〇機、戦車（装甲）タンク七〇〇台、軍艦一〇〇隻、大砲三〇〇門、これをドルに換算して凡そ四億九八〇〇万ドル。その外、掃海艇三隻、戦闘機一九機、ライフル銃四五、七〇七丁、小機関銃一〇、〇〇〇丁、装甲車三四六台、小型戦車二四一台、装甲砲牽引車二〇〇台が六一年マラヤから送られた（U・P・I報道）。軍事基地網は、飛行場（重ジェット機を扱うるものを含む）五七、自動車道路は三二キロ（軍用道路に使用出来る）、海軍基地一一（ダラット港北部に潜水艦基地建設準備中）、農業セツルメント（南ヴェトナムの「後方基地」）一〇三箇所、（住民一六万人収容）。なお、これを裏付ける精細な地図も挿入されている。

(註14) ディエムの農業改革というのは、彼の与党ともいふべき「民族解放運動党」のスローガン反植民地主義、反封建主義、反共産主義のうち反封建主義の旗印でおしすすめられた。これはアメリカ人顧問W・ラデジンスキー(Ladajinski)の援助で、南ヴェトナムでは既に一九五三年からはじめられていた。フィリッピンや南朝鮮での経験をラデジンスキーが教えたものだが、これの施行は南ヴェトナム人民の不満を著しく高める結果となっている。この骨子は、理論的には、五三年案では北部三六ヘクタール、中部四五ヘクタール、南部一〇〇ヘクタールまで農民の土地所有を認めるといふものであったが、抵抗戦争中、都市へ逃亡していた地主が、平和回復の後に、既にホー政権の農業改革によって農民に分配された土地を奪還するための復讐にこの案がつかわれた。そしてその結果は一九五五年二月五日第七号令によって、中世紀的地主の特権が再び保証されることになった。（詳しくはL'Anticolonialisme, L'antiféodalisme et L'anticommunisme au Sud Viet-Nam. Ed, en Langues Étrangères Hanoi. 1956. を参照せられたし）

(註15) 封建的地主と買弁ブルジョアジーとは帝国主義者の植民地支配の支柱であるが、ヴェトナムの買弁資本家は、フランスの植民地時代に既に発生し、フランスの植民地主義者は、少数の買弁資本家のサービスを自分に結びつけることができた。南部ではこのブルジョアジーの一部は、とりわけ大土地所有者であり、時に数千ヘクタールに及ぶ大土地所有者であった。抵抗戦争の間、これら買弁ブルジョアジーはバオダイを支持した。五四年以後のアメリカ帝国主義の干渉と侵略下に於

て、これら買弁ブルジョアジーの間に分化を生じた。旧時代の親私買弁資本家は政治的にもイデオロギー的にもフランス帝國主義に従属し、サイゴンにおける彼等の家族はフランス名を用いフランス語を語り、その若干のものは日本人やアメリカ人と協力することが出来なかつた。

ところが、戦争によつてヴェトナムに新しい買弁ブルジョアジーが生れた。最近のブルジョアジーは数年の間に、戦争商売により闇市場で財産を蓄積したものである。特に新植民地制に代つてからは、権力への参加、接近によつて財産をつくり上げたものたちである。権勢家は、この新しいブルジョアジーの「分泌物」である。彼等は政治的機能と経済的特権とを兼ね備え、西の商品の輸入と植民地原料の輸出を独占している。マイ・ヴァン・ハム(Mai Van Ham)はその典型である。彼は避難民処理委員会の議長であり、国際カトリック大会でのカトリック宗団と政府の代表者である。

新植民地時代の帝國主義搾取の今一つの形態は、合弁会社の創設であるが、権力についたただ一つの家族が合弁会社への参加権を独占した。だから現在のヴェトナム買弁ブルジョアジーの致富の源泉は、「アメリカ援助の横領」である。[Nguyen Van Ba:—Le Front national de libération du Sud-Vietnam, "Democracie nouvelle" No. 12, 1962, p. p. 65—76]

なお、ホアン・ルウン(加茂徳治、真保潤一郎訳)「南ベトナム買弁資本の経済情況」(歴史評論)一九六三年四月号)参照。

三 南ヴェトナム人民の闘争

サイゴンの政府は、武器に拠らなければ全国を支配することの出来ないアジアの最も専制的な制度となつた。すべての人間感情を足下に蹂み躪り、民族的誇を喪失した制度は、抑圧によらなければ維持されない。だが、抑圧された民族は、奴隷化された状態にいつまでも忍従しておれるものではない。抑圧が強まれば強まるほど抵抗もまた強まる。これが歴史の弁証法である。

十七度線の南のヴェトナム人は、新しい侵略者に対して、民族解放のための闘争を行う以外に道はなかつた。

抑圧者が、フランス植民地主義者よりもより強く、より富裕で、より惨酷なものであろうとも、抑圧者に対して敢然と立上る以外に方法はなかった。合衆国がこの国を掌握すればどんなことが起るか？ 人民は、最初は怪しんだ。しかし間もなく答えを見出した。若し人民が精力的にまた敏速に行動しないとしたら、奴隷化と戦争が身にふりかかってくるに違いないと。ディエム政府がアメリカ人に追隨するのを見て、人民の憤怒は爆発した。

長年にわたるヴェトナム人民の英雄的闘争は、フランスの軛を太平洋の彼方からの新しい軛に換えることを目的としたものではなく、あらゆる種類の軛を転覆することを目的とするものであった。なぜなら、一九五四―五五年に、サイゴンに上陸した大部分のものは、ジュネーブ協定に従って否応なしに居住地を変更した正直な人民——南ヴェトナムではこれらの人々を避難民と総称する——を別として、フランスに追隨した者たちで、全傀儡行政機関と遠征軍の周囲に群る暴民であったからである。間もなく、ディエムは民族の最悪の敵であることがわかってきた。彼が合衆国の援助で人民を抑えつけるためにとった乱暴な諸手段⁽¹⁶⁾は、新しい死刑執行人の手で、人民の生命と財産とを脅かすことであつたからである。

敵対は間もなく全住民を包含するものとなり、抵抗はあらゆる分野においてまたあらゆる形態をとって拡がっていった。

都市では、機会ある毎に人民は抵抗した。市民は政府の組織する祝祭または集会をボイコットした。警察の手で出席を強要された者は黙って立つか、当局の希望するスローガンと反対のスローガンを叫んで集会をぶちこわした。商工業者（民族ブルジョア⁽¹⁷⁾）は、苦情を訴え、請願を行い、市場ストライキを行う準備をした。労働者⁽¹⁸⁾は、機会を逸せず仕事を中止した（ストライキ）。新聞人は、様々の意味にとれる論文を発表して抵抗した。その

論文の真意は誰にでも読みとれる内容のものであった。公務員は彼等の仕事をサボった。

ディエムの用いた各種の抑圧手段は人民によってばけの皮を剥がれ、人民はその手段をディエムに向って向きをかえ、その真の目的をあばき、そして逆効果をあげた。ディエムが一九四五―五四年の抵抗戦争を賞讃することを禁じた場合、著作者や劇作家が一九世紀のフランスの征服に対して行われた抵抗運動を取材し、更にヴィエトナム史における色々の抵抗戦争について書いたり演じたりしたことは、他の裏切者の不誠実をかりてディエムの反民族的政策を暴露し、ディエムを孤立化することに役立った。いわば、インテリゲンチヤの抵抗である。彼等は後輩や部下の愛国心を呼び醒したのである。

このゆるやかな抵抗は、水の絶え間のない滴りのように、ディエムの勢力を時々刻々に侵蝕し、その軍隊の士気を弱めていった。ディエムが新聞社を徹底的に調べあげるため、その閉鎖に先んじて、無頼漢をさしむけたことは、サイゴン政府が人民の抵抗にたちうち出来なくなってきたことを証拠立てるものであり、サイゴン政府が屢々改革され、官吏や士官が絶えまなく肅正されたことは、その反映で、ディエムの孤立化の証左であった。

地方における人民の抵抗は右と事情を異にする。農村は以前の抵抗運動の基地であった。ここでは誰が祖国を愛し誰が祖国を裏切ったかについて、誰の眼をも覆うことができない。だから、ディエムは、その地方政策において都市におけるよりも遙かに暴虐な手段を用いなければならなかった。

ディエムが、地方機関に登用したものは、農村における前々からの官吏または抵抗運動に対してフランスの旗の下に武器をとった者たちであった。しかし人民はこれら裏切者の顔を大統領のそれよりもよく知っていた。彼の配下の百姓たちから信頼されていない連中であった。彼等のうちのある者は、彼等の以前の主人公を想起し、ディエ

ムの警察をたたえた。しかし、その大部分はディエンビエンフーの勝利によって目醒め、彼等の親類縁者の多くが人民の側にあることを知っていた。中には、ディエムの側に走ったものもある。そうした連中は、復讐と略奪のためその地位をうまく利用したとはいえ、ますます人民から孤立していった。多くの者は強制的に任命された。

ディエムは、人民の支持を失っているこの地方機関に、軍補助の農村警防団や青年団の指揮権を与えた。そして、地方の弾圧は、これらの農村警防団や青年団に委された。しかし、ディエムは、農村の犠牲者が偶然とはいえこれらの死刑執行人の親類縁者であるということを忘れていた。

サイゴンは、農村当局に内在する危険を知らなかったわけではない。この抑圧機関を強化するためのあらゆる手段を採求しなかったわけではない。「共産主義告発」運動⁽¹⁹⁾や「繁栄区」⁽²⁰⁾の創設が試みられた。

共産主義者告発運動、謀殺、逮捕は、ディエムに対する人民の憎悪を高めるだけであった。農村当局が転覆されるに先だって行われた掃蕩作戦^{II}共産主義者撲滅運動は、この政府と軍隊の正体を暴露してしまった。軍隊は以前のフランス遠征軍のように、人民の反撃にあって壊滅した。軍隊が去った後の農村には、人民によりその再建と強化とは有罪であると宣告された旧当局が残される。到るところで流血、破壊、死刑執行、そして極端な困窮。こうして、一九六〇年までに南ヴェトナムの三分の二が南ヴェトナム人民の手で解放されたのである。

掃蕩作戦と襲撃作戦とは、信頼出来る部下たちの生命の安全を保証することが出来なかった。そこでディエムは、フランス遠征軍の故知に倣って「繁栄区」(「農業都市」も同義)と呼ぶ地区をつくって、そこえ住民を集中することにした。戦略的には、軍の後方兵站部をつくり、ゲリラ隊から農民を隔離するのが狙いであった。しかし、この方法は人民の仕事場、生活の道、慣習をうちくたく。住み慣れた家屋、庭園、祖先の墓を棄てさせて農民を鉄

条綱や竹矢来で囲んだ地域へ追い込むのであるから、心理的には不人気で、経済的には災厄であった。だから、この「繁栄区」は、恰も一九五一年フランスが紅河デルタで試みて失敗したように、成功を収めえていない。

合衆国は、悪徳の集団に転落した。彼等は住民を支配するため暴力に頼らねばならない。しかし、暴力に頼ること多ければ、これに対する人民の憎悪も増大する。彼等は、人民が節度をもった抵抗に自らを抑制することができなくなり、杖、竹槍、新月刀を武器として用いざるをえないところまで暴虐となった。

自己防衛の組織は抑圧政策に対する当然の解答である。それは人民の意志に反して暴走する政府——外国から後援されて——に対する人民の自己保全の権利がつくりだすものである。この運動は、アメリカの憲法でも認めている合法的権利である。それはまた、住民の間に深い根を下ろしているから、容易に打ち勝ち難い力でもある。

一九五七年初め頃、軍隊が少しばかりの武装した人民と衝突しはじめたとき、ディエムは彼の武装した軍隊の独占が充分具体化されていないことを知った。そこでディエムは、一方では合衆国に援助の増加を請願し、他方では、南ヴェトナムが戦争状態にあることを宣言した。そして住民に対し彼の自動車部隊を差向けたのである。だから、ディエムのいう戦争とは、南ヴェトナムと他国との間の戦争でもなければ、南ヴェトナム政府とヴェトナム民主共和国との間の国内戦争でもない。それは十七度線の南のヴェトナム人民に対する軍事作戦すなわち武装弾圧のことであった。

非協力の闘争から武装抵抗に至る人民の敵対は、ワシントンとサイゴンによって「内部からの侵略」、「転覆工作」というレッテルを貼られる。力による解決の支持者の論理は、戦争を合理化するために、自からの侵略は頬被りして、相手を侵略者ときめつける。その相手が人民では都合が悪いから、ヴェトナム民主共和国が南部へ軍隊

を送っていると非難する何の証拠もない。

人民が彼等の自衛隊を組織するのを余儀なくしたのは、ゴードイン・ディエム彼自身である。ジュネーブ協定調印の後、すべての南ヴィエトナムの反仏ゲリラ部隊が休戦命令に従い解散したのにディエムは殺人を敢行した。一九五四年十月二十五日には早くもヴィンクスアンで四一人が殺され、一一六人が負傷し、七〇人が逮捕された。殺戮はただだと長引き、益々大規模なものとなっていった。一九五九年にはビエンノア地方で行われた作戦で、合衆国のレスター大佐の直接指揮のもとに、一五、〇〇〇の正規軍が、砲兵隊、自動車部隊、空軍、保安隊、警察官と組んで参戦し、彼等はいたるところで略奪、放火、組織的襲撃を行った。航空機は軍隊によって破壊を免れた到着処へ送られた。捕縛されたものは恐るべき待遇——鞭打ち、気が狂うまでの拷問、手斧による打首、中世紀にあったような内臓除去——をうけている。

弾圧の軍事的性格は、それが無差別弾圧であったところにある。年寄、婦人、子供が、他のものと同様に爆弾、銃弾の餌となっている。このようにして、過去七カ年の間に、死者九万人、負傷者十九万人、拘禁者八十万人（内六十万人が拷問の結果不具者となる。）驚くべき弾圧である。若しこれらすべての者が共産主義者であるならば、ディエムは、全部の共産主義を世界から絶滅するのに大した時間を要しないであろう。

ディエムのみる共産主義は、共産党員である必要もなければ、マルクス主義把持者である必要もない。平和を愛するもの、ジュネーブ協定に賛成するもの、祖国の統一を支持するもの、誰でもが共産主義者に見えるのである。フランスに抵抗して武器をとったもの、抵抗軍の組織に参加したものも亦共産主義者である。外国人または地方のボスによって搾取され、賃金値上げのストライキを行ったものも共産主義者である。悪い待遇に堪えかねて逃亡す

る農園労働者も亦共産主義者である。あくまで土地を欲し、ディエムのつくった「繁栄区」へ家族をすてて行くのを拒むものも共産主義者である。アメリカ商品が市場に氾濫して民族工業が死滅するのを喜ばないブルジョアも亦共産主義者である。人民の不満を反映する新聞記者もまた共産主義者である。……

要するに、ディエムの共産主義撲滅戦争Ⅱ弾圧の対象は、右に述べたような善良な愛国者たちに外ならないのであって、ディエムの強い軍隊（約一五、〇〇〇と自ら認めている「共産ゲリラ」に対して約五〇〇、〇〇〇万の軍隊を養成した。）が人民の武装力を絶滅することができないのは、人民の武装自衛隊が、怒れる人民によって組織され、また保護されているからである。

南ヴェトナム人民の闘争が武装闘争にかわってきたのは、前記のように、五七年はじめころからである。初めは原始的兵器で散発的に戦った武装自衛隊が、今日では近代武器を駆使できる人民解放軍に成長するに到った。本格的武装闘争に入ったのは六〇年からであり、人民解放軍が出来たのは六一年二月十五日である。

(註16) 一九五九年五月に出された「一〇・五九法」は、「一〇・五九ファシスト法令」といわれる大変な弾圧法令である。その前年（八月一日施行）、すでに南ヴェトナムの青年男子を強制的に兵員に編入する「徴兵令」が法制化されている。同年十二月にはフーロイ政治犯収容所で大量の虐殺事件（毒殺）が起っている。この毒殺事件は、国際与論の反響をよんだ。

真保潤一郎「南ヴェトナム民族解放戦線成立の基盤と展望」（労働運動史研究会編「労働運動史研究」三六号）参照。

(註17) 一九五八年三月、地方繊維工業の破産がおこった際、企業家たちは、警察のとめるのもきかずに国民議会に出席し、政府に外国織物の輸入禁止を要求した。この時ブルジョアジーは彼の側に労働者階級の味方がいることを発見した。……「農村では地主、富農、顔役も同じ地位におかれる。兵士が村を焼きに来て、戦略村に再結集すべく住民を強いるとき、火は金持の家だけを焼かずにはおかない。アメリカが食糧供給を困難にする目的から作物を破壊するため有毒な化学薬品を用いた時、最初に声を上げるのは金持であった。彼等の作物が損害をうけただけでなく、人間も亦中毒の犠牲者であったか

らである」(註18) Nguennu Van Ba:—Le Front national du Sud-Viet-nam, ("Democratie nouvelle," No. 12. 1962, p. p. 71—72)

(註18) 「植民地制度下のストライキについてフランスのストまたはデモの例を想像してはならない。フランスでのストライキは確かに激しい闘争ではあるが、そこでは誰も生命の危険にさらされるものはない。サイゴン政府のもとでは、ビール醸造所や硝子製造所の労働者は、出入するトラックを阻止するため工場の門前に座り込むとき、トラックが彼等を轢殺することを予期しなければならぬ。プランテーションの労働者または電気工場の労働者がストライキを起すとき、官憲は横暴にも発砲し、指導者たちは射撃される危険がある。フランスではストは組合の示威であるが、サイゴンでは革命的行動である。小冊子を配布する時、ビラを貼るとき、または単にハノイのラジオを聞く時でさえ、死の危険がある。……事実、空手空拳でファシスト権力に対抗してストを組織する方が農村でゲリラ戦をやるより危険な場合が屢々ある。……」(前出書、七〇頁)

(註19) 「ディエムの政府とアメリカの顧問は、いわゆる『反共主義告発』運動を制定した。住民は集合を強制される。或は公の場所に大衆的に集会し或はその組織の代表者の演説を聞くため小集會に集合することを強制される。各自は彼が知っている旧抵抗者を告発することが出来る場合、同意を表明することを強制されるのである。この運動に対する闘争の形態は最も多種多様である。棄権、口論、演説者への罵声、警官があまり敵しすぎる場合には、母親は彼等の子供を集合につれてゆき泣かせる。老人は咳ばらいをし、集會は前代未聞の騒ぎのうちに終る。……」(同上、七四頁)

(註20) 「一九五九年末、米ソ政府は新設の小村に農村住民を再結集するいわゆる『繁栄区』を創ることを決定した。この繁栄区は農村で急がれている近代化の条件をつくる筈であった。実際には、敵対する住民の再結集の古典的となつた作戦が問題である。軍隊は砲撃して村を焼き次いで住民が鉄条網で囲まれた抑留所の中へ強制的に集められる。そこから人々は日中、護衛隊の監視の下に働きに出かけ、晩になつて監視の下に帰つて来る以外には抑留所の出入ができないのである。

若干の新聞で『Agro-ville』と名づけられた「繁栄区」は、この区がつけられるのに応じて農民により破壊された。一九六一年アメリカの経済学者スターレーとテーラー將軍とは、この名を変じて『戦略村』と呼ぶようディエムに忠告した。昨年中、アメリカ政府は軍事援助を強化し、南ヴェトナムへ、ポート、水陸両用タンク、警察犬、反ゲリラ戦の専門家を供給し農村住民の全部を『戦略村』の中へ集めようと試みた。……」(同上、七〇頁。)

四 南ヴェトナム解放民族戦線の成立

一九六〇年十二月二十日、南ヴェトナムの愛国勢力は、ディエム政権の統制圏外の地域に集合して「南ヴェトナム解放民族戦線」を結成した。この時まで、サイゴンの統制外の地域は、(一) インドシナの米倉として名高いメコン・デルタの大部分。(二) 高原——これは旧アンナンの狭い沿岸平野に連なる重大な戦略拠点——の大部分に及んでいた。

南ヴェトナム解放民族戦線の出現は、断じて偶然の出来事でもなければ、また少数の人々の工作でもない。この戦線は一九五四年のジュネーブ協定成立の直後から、六カ年に亘って、アメリカ帝国主義の干渉とディエムの専制に抗して苦闘をつづけた南ヴェトナムの愛国的諸勢力の広汎な連合としてたちあらわれたものである。この諸勢力の合同を促したものは、本稿一、二、三で見てきたように、アメリカ帝国主義の南ヴェトナム掌握とディエムの独裁が、南ヴェトナムの全人民を、我慢のしきれない状態に追いこんだ結果に外ならない。そして、隷属と弾圧に対する南ヴェトナム人民の抵抗は、いかなる形態をとるにせよ、人類の合法的権利の行使としてこれを認めねばなるまい。

十二月二十日創設の南ヴェトナム解放民族戦線の行動綱領は、⁽²¹⁾下の十項目を含んでいる。

- (一) アメリカ帝国主義の偽装植民地統治及びアメリカの従僕たる独裁的なゴードイン・ディエム政府を打倒して、民主民族連合政府を樹立する。
- (二) 幅広く、進歩的な民主主義を実現する。言論、出版、信仰、集会、結社、運動の自由、その他の民主的自由を公布する。

すべての政治犯人に一般的恩赦を保障し、「繁栄区」と呼ばれる捕虜収容所とすべての「再植民センター」を解散し、一〇・五九のファシスト法令その他の反民主主義法令を廃止する。

(三) 合衆国とその忠僕の経済的独占を廃止し、国産品を保護し、国内産業と商業を奨励し、農業を拡張し、独立自主の経済を樹立する。失業者に職を与え、労働者、事務員、軍人、公務員の賃金を引上げ、不当な罰金を禁じ、公正かつ合理的な税制を採用する。居住を変えられた者たちを、若し希望するならば故郷へ帰還する手助けをする。彼等の中で南部にとどまることを希望するものには職を与える。

(四) 地代の減額を行い、農民に現在耕やしている土地の耕作権を保証し、村落共有地を再分配し、土地改革を推進する。

(五) 奴隷化と腐敗化のアメリカ式文化を除去し、民族的で進歩的な文化と教育を打立てる。文盲を退治し、より多くの学校を開設する。教育と試験制度を改良する。

(六) アメリカ軍事顧問制度を廃止し、ヴェトナムにおける外国軍事基地を撤去し、祖国と人民を守る国民軍を創設する。

(七) 男女同権、異民族同権、少数民族の自治権を保証し、ヴェトナムにおける外国居留民の正当な権利を保護し、海外居住ヴェトナム人の利益を守り且つ世話する。

(八) 平和、中立の外交政策を実現し、ヴェトナムの独立と主権を尊重するすべての国と外交関係を打立てる。

(九) 二つの地帯間（南北）の正常な関係を樹立し、祖国の平和的再統一を促進する。

(一〇) 侵略戦争を阻止し、世界平和を積極的に支持する。

以上の十項目（原文はもっと詳細）をうって一丸としたものが民主民族革命の正常な任務である。しかし、情勢次第で、外国のしめつけから祖国を解放する民族的性格に重点がおかれる。他方、民主的性格が極めて柔軟性をもっていることは、プロレタリアートや農民と同様にブルジョアや上流階級の進歩的な人々をも集合する組織であるのを見れば、会得される。

換言すれば、事実の客観的分析によって、戦線は、奴隷化の脅威がヴェトナム人民にとって重大な危険である

との結論に達している。だから、サイゴン政府の人物を交代することについては、若しその人物がディエムのようにアメリカの御先棒をかつぎつづけるなら、全問題を未解決のままに残すことであるから、戦線の行動綱領においては、革命の民主的性格を次のように表明しているのである。

(一) 独裁とファシズムとは絶対に妥協しない。ヴェトナム国民に主権を回復するため、南ヴェトナムに政府を樹立する。——そのため、立法議会の選挙に関する条項、民主的自由の実行、等々が必要となってくる。このブルジョア民主主義の規準を超える要求は何も出していない。

(二) 農業問題を決定的に解決するため、終局的には耕作者に土地を与える土地改革の第一歩として、直ちに地代の引下げを行うことを提案している。この処置は、南ヴェトナム人口の大多数を形成する貧困な土地なき農民の惨めさを救うことを目的としている。交渉によって国家は、各地方の具体的状況に応じて定めた正当かつ合理的な価格で、所定の地域に地主が余分にもつ土地を買い上げ、土地をもたぬまたは土地倒れの農民（多くの土地をもちながら現金に不足している）に、これを分配する。この処置は、有産階級に対し、将来の土地改革に関し、彼等を安心させる処置である。これ以上合理的で正当な政策はありえない。

(三) 戦線は、平和、中立の外交政策をとっている。これは頗る独創的でまた最も現実的な決定である。南ヴェトナムの中立ということはヴェトナムにとって十七度線の両側での政府の政治的性格が相違するということを意味する。ヴェトナムは常に単一の存在であった。その経験からヴェトナム民主共和国は、民族独立を強化し、全民族に繁栄をもたらす最上の方法として社会主義を選んだ。これはまた、数百万の南ヴェトナム人民の立場でもある。

だが、平和と解放とは、ヴェトナム人民を犠牲にして獲得されたのである。だからヴェトナム人が直面しているのは単一の政党の政治綱領ではなく、関連ある諸党派の特殊な傾向に心をとめてつくりあげられた共通の綱領である。中立こそは、凡ゆる愛国者たちがうけ容れることができる解決策である。だから、中立政策は現在の偽装植民地政権に比べ重要な一歩前進をなすであろう。全国民をあげて、民主的な勢力を統合する必要を語ることは、お互に譲り合い、民族的利益の防衛に積極的に貢献をするため各グループが此の戦線に密着することである。

外交政策における中立政策は、一片のプロパガンダに過ぎないのではなく、戦線闘争の成功の重要条件として、南ヴェトナムにおける諸勢力の結合とバランスから生じたものである。

戦線は、この中立政策を次のような見地から見ている。

- (a) アメリカ帝国主義者のとりまきと外国諸国が締結し民族主権を侵害する全ての不平等条約を廃棄する。
- (b) バンドン会議で声明された通り、政権の如何に拘らず平和共存の原則に従って、すべての国々と外交関係を設置する。
- (c) 平和を愛する中立諸国との緊密な提携。東南アジアの諸国、第一には隣国カンボジアとラオスとの友好関係を拡張する。
- (d) 如何なる軍事ブロックにも加入しない。また如何なる軍事同盟をもつくらない。
- (e) ヴィエトナムを無条件で、進んで援助せんとする国からは経済援助をうける。

以上の事柄を遂行することは、帝国主義者の強慾の餌食となり、おそるべき世界戦争の温床となりかねない東南アジアにおける平和擁護に貴重な寄与をなすだろう。

(四) 全ヴェトナム人の熱望するヴィエトナムの平和的再統一問題は、特に困難を極めたその綱領の第九条を發展させて、戦線は次のように詳述する。

「戦線は南北二地域のあらゆる形式の話し合いとヴィエトナム人民と祖国に利益のある方法による平和的統一を主張している。

国家が統一されるまでの間、二地域の政府はお互に話し合いを行い、民族を離間させる宣伝、戦争宣伝を禁止し、お互に兵力を使用しない。二地域間の経済・文化交流を行なう。両地域の人民のために、移動と交易の自由、訪問と通信との権利を保証する。」

ワシントンがサイゴン政府に指令したヴィエトナムの不法分割を恒久化しようとする最も馬鹿げた処置は、最後には廃止されねばならない。平和的ヴィエトナムの再統一を主張して、戦線は一九五四年のインドシナに関するジュネーブ協定の実際の条項にひたすら従ってきた。戦線の立場は、共産主義者に影響されているとあてこすって、ワシントンがフォスター・

ダレス構想の分離主義テーゼを擁護するためのよい口実を失わしめるだけでなく、アメリカの新植民地主義者が、全ヴィエトナム人民の熱望に答えた解放戦線の結成と強化とを妨害することを不可能にするものである。

一九六〇年十二月から、解放戦線の叙上の行動綱領は、住民の間に甚大な感激を呼び起した。幾百万の人々が、アメリカの干渉主義者とその卑屈な追従者たちと闘うために、黄色い星をちりばめた青と赤地の旗（今はヴィエトナム民主共和国の国旗となったヴィエトミン戦線旗は赤地の中央に黄色の星一つを配したものだ）、この戦線旗は、赤地と青地に二分し黄色の星一つを配している。）の下に立上った。

だが、アメリカの戦争挑発者たちも黙ってはいなかった。反共の看板でカムフラージュした彼等の征服陰謀は、失敗しそうになると図々しく軍隊投入の歩調を早めた。即ち、ジョンソンロディエム軍事同盟（一九六一年五月）、ステレーの平定計画（同年七月）、テラー計画（同年十月）、ノルディングロディエム協定（同年十二月）、アメリカ軍のサイゴン上陸（同年、十二月）、一九六二年二月の大量の武器、軍需品の導入と共に、サイゴンに恒常的作戦司令部の設置（軍事援助司令部）等々、南ヴィエトナム人民に対し、アメリカ軍の直接介入する戦争計画は数カ月で完成された。

南ヴィエトナム解放民族戦線は、叙上の征服戦争に直面して、その最初の大会を一九六二年一月に開催し、次の十項目から成る緊急綱領を作成した。

- (一) ジェネーブ協定を尊重し、アメリカ帝国主義者に対し、その武装侵略を停止し、武器、軍事顧問と軍隊とを南ヴィエトナムから撤退し、残虐なステレー、テラー、ノルディング計画の放棄を要求する。
- (二) 南ヴィエトナムに直ちに平和を回復するため、対人民戦を即時に停止し、テロ、暴虐な逮捕、住民の大虐殺を終らせ、秩序と安全の保証を要求する。

(三) 民主的自由、すべての政党を結成して自由に行動する権利、出版、信仰の自由等々を許す。すべての政党は国民議会その他の全ての選出機関に候補を送る権利をもつ。

(四) 共に非合法であるから、現在の国民議会を解散し、現行憲法を廃止し、新たな国民議会を選出し、民主的な路線で新憲法を制定する。

(五) すべての政治犯人を釈放し、あらゆる行政的集中キャンプとその他のあらゆる形態の集中制度を廃止する。

(六) 非常事態を終らせる。初年兵徴募、並にすべての軍隊の増強を禁ずる。婦人、公務員、学生、生徒及び幼少年を軍隊に編入する法令を取消す。住民の集中、強制撤去、土地収奪を禁止する。

(七) すべての新課税を禁止し、不当課税を切りすて、専横な課税や罰金を廃止し、労働者、兵士、公務員の賃金を適当に増額する。

(八) 労働者の解雇を禁止し、失業者及び新卒の学生、生徒に職を与える。

(九) 経済的独占を禁止し商工業における取引の自由、国内産業の保護と育成。外国貿易の自由。無条件経済援助はいかなる国からもうける。

(一〇) 平和と中立の外交政策を行う。南ヴェトナム、カンボジャ、ラオスからなる中立地帯をインドシナに設ける。右三国はそれぞれ十分な主権と独立を維持する。

この新項目のうち、(一〇)の南ヴェトナム、カンボジャ、ラオスを包含する中立地帯の設置は、近隣諸国の協定をえてはじめて構想しうることであり、実際、これらの国々は自由に同意した責務の実施に関係をもつものである。而も、当時ワシントンとSEATOのアジア衛星国から侵害されていたカンボジャとラオスにとっても、この提案は受け容れられる可能性のある現実的な政策であった。

次いで、一九六二年七月二十日（ジュネーブ協定成立八周年記念日）、解放戦線は、救国のための四つの緊急提案を含む厳かな宣言を発した。そのうち、あらゆる諒解の第一条件が、アメリカ合衆国の新植民地主義者の退陣である

ことが訴えられており、民主民族連合政権が、行動綱領に賛同するあらゆる政治傾向に属する諸政党、社会階層や階級、宗教や少数民族の代表者をもって構成する旨が宣言されているところに注目すべきであろう。

南ヴェトナム解放民族戦線第一回大会は一九六二年三月十三日、南ヴェトナム解放地区のある場所で開催され、それには次の組織⁽²²⁾の代表が出席した。

- 人民革命党
- 民主党
- 急進社会党
- 労働者解放同盟
- 婦人解放連盟
- 人民革命青年連盟
- 愛国・民主ジャーナリスト協会
- 作家・芸術家解放協会
- タイ・グエン（高原）自治運動の組織
- 自衛隊
- その他、海外在留ヴェトナム人代表、アジア・アフリカ連帯ヴェトナム委員会代表、世界平和擁護南ヴェトナム委員会代表、その他多数の愛国的人物

大会はまた、三一人から成る中央委員会を選出した。そのうち、二一議席（うち三議席は副議長）を将来の参加者のため保留。次の常任委員会の構成は、この組織の性格を窺知させる⁽²³⁾。

グエン・フー・トー (Nguyen Huu Tho) (議長) 此の人は以前サイゴン・シヨロン地区平和運動の副会長で当時五〇才。法律学者でサイゴンで有数な弁護士であった。インドシナ戦争中愛国的活動のため、フランス植民地主義者によりソン・ラへ

追放されていた。釈放されるやサイゴン・シヨロン地区平和運動を組織した。(一九五四年)ディエム政府は彼を平和回復を記念する大衆デモに参加した廉で投獄した。しかし、インテリと大衆の間に声望があったのでそれを惧れてディエムは死刑を見おこった。一九六一年脱獄するや外国の新たな侵略に対して活潑な闘争を開始し、凡ゆる困難に打ちかって戦線議長の重責をにない、レジスタンスのメンバーを植民地主義司法権に対して熱心に弁護した。

フン・ヴァン・クン (Phung Van Cung) (副議長) || 医学博士で南ヴェトナム平和委員会会長で、声望がある。

ヴォー・チ・コン (Vo Chi Cong) || 南ヴェトナムにおける人民革命党中央委員会の代表者である。

フュイン・タン・ファット (Huynh Tan Phat) || 建築家、南ヴェトナム民主党書記長。

ソン・ヴォン (Son Vong) || クメール族高僧である。

イデュット・ラマヨ (Ydut Ramayo) || タイグエン自治運動会長、エデ族 (Ede) でプロテスタント。

グエン・ヴァン・ヒュー (Nguyen Van Hieu) || 戦線書記長。教授。南ヴェトナム急進社会党書記長。

以上の全部は試練済みの愛国者で彼等が戦線の指導部にいることは特に重要である。ヴォー・チ・コンとフュイン・タン・ファットは以前のレジスタンスのメンバーで、前者は最近組織された人民革命党を代表する戦線中央委員である。この党は労働者と被傭者の利益を擁護する。後者は一九四四年に組織された民主党を代表する。この党は知識階級やプチ・ブルや民族ブルジョアの利益を守る。数年前に組織され書記長グエン・ヴァン・ヒューに代表される急進社会党は、中間階級の党である。特に注目に値するのはソン・ヴォンとイデュット・ラマヨの存在である。尊者ソン・ヴォンは宗教的愛国者で偉い有徳の高僧で、南ヴェトナムにおける大勢のクメール族 (五〇〇、〇〇〇人) の代表として名声をはせている。またイデュット・ラマヨは、高原の百万の住民をしたがえている。ディエムの反民族的政策に強硬に反対して追跡されているものと官吏である。

(註21) 筆者はハノイを訪れた際に入手した "Manifesto of the South Viet Nam National Front for Liberation, 1955"

著者も発行所も不明の英文の小冊子をもっている。これに「南ヴェトナム解放民族戦線の宣言と綱領」との二つが含まれている。色刷の戦線旗も挿入されている。また前出、真保潤一郎「南ヴェトナム民族解放戦線成立の基盤と展望」(「労働運動史研究」三六号、一八一—二二頁。)に「南ヴェトナム民族解放戦線行動綱領」と題して全文が訳出されているから参照されたい。

(註22) 前出、Tran Van Giau, Le Van Chat:—The South Viet Nam Liberation National Front. p. 61.

(註23) 同 pp. 62—64

五 南ヴェトナム解放民族戦線指導下の民族闘争⁽²⁴⁾

A—政治闘争

解放戦線が樹立されたことにより喚起された情熱は、愛国勢力の第一目標すなわち、解放の旗の下に民族的連合を成しとげることを容易ならしめた。

南ヴェトナム人民の政治闘争は、一九六一年以前に既に驚くべき段階に達していたところえ、この解放戦線が樹立されたのであるから、戦線の樹立を歓迎する幾千という支持集会が全国にわたってひらかれ、旗や吹流しが国の隅々まではためいた。

各省では、デモが陸続と行われ、停止することを知らないありさまとなり、農民の行進は、地方の主要都市(ベシ、チュエ、ミト、ツードーモ、ゴコン、カイライ、カオラン、モーカイ、チャンバン、ソクチャン、カモウ等々)へと、つまり農村から都市へと向けられた。そして政府の代理人や兵士の犯した罪状を問責する請願書が受理されるまで、群衆は省庁や郡庁を包囲して動かなかった。ディエム当局の支配は往々にして都市周辺一〇キロ範囲に及

ばなかったから、群衆の行進をすばやく阻止したり、集会を解散したりすることができなかった。当局は次の掃蕩戦まで人民の圧力の前に屈服する以外仕方がなかった。次の掃蕩戦が、更にいっそう大きな怒りの爆発となるのは容易に想像されることである。

このような政治闘争の規模と効果とについて例示しよう。それは領土の九〇%が完全に解放されているベンチュイ省の場合である。一九六二年四月一日から五月二十日までの五〇日間に、七三七回の集会、二八〇件のデモ行進、一〇、〇二七件の村での集会が組織され、アメリカが後楯をするディエム当局が犯した犯罪を明るみにさらけだした。また八四人の犠牲者の鎮魂祭が施行された。また、戦線の地方実行委員会の集会は一、〇七八回、大衆と当局間の会合は二七九四回もたれ、一五、〇〇〇件の請願、二二一件の決議その他の要求を強制的に受理させた。当局からかちとった約束は全く、巧妙に工夫された無数の方法で、時を移さず全住民に知らされた。そうすれば後になって食言する省長は、更に大きな反抗ととっくまなければならぬであろう。これらの穏かな行動は、消極的どころではない。ベンチュイ省の住民は、このようにして、同じ時期に理由なく逮捕された五七一人を釈放させ、殺されたり傷を負わされたりした者たちの家族のため三三、〇〇〇ピアストルの補償を支払わせ、軍隊に強制募集された四五三人の青年を放免させ、九五〇件の強制労働を取消させ、また強制的に軍事訓練をさせられている四〇〇人の少女を自由にした。

このような反対できない運動と平行して、解放戦線は、住民を指導してディエム政府の地方機関を解体させ、またはその活動を麻痺させた。人民を傷けたものたちは立派に償いをしなければならぬし、また再教育をうけなければならぬ。解放区では、村落共有地（公田、公土）は、恵まれない階層の生活条件改善のため公平に分配され

ている。

大都市では、闘争は以前には尻ごみしていた階層にまで拡大され、且つ、よりいっそう精力的な形をとりはじめた。

一九六二年のはじめの六カ月だけを勘定に入れて、サイゴンで起った大罷業は、スタバック会社の労働者五、〇〇〇人の三カ月のスト、ヴィニテックス会社の一五、〇〇〇人のスト、輪タク運転手五、〇〇〇人のスト等々である。更に、バス運転手、製靴工、ラジオ技工、その他の労働者の要求闘争を挙げうる。これらは小規模ではあるが、重要さにおいて優るとも劣らないものである。これらの運動の目的は大抵、勝手気儘な解雇反対、労働日短縮、賃金値上げ等の要求貫徹であるけれども、それが戦線の政治的目的と結びつけられていることはいうまでもない。このようにして、ビデックスコ会社の労働者は、工場を占領して操業を停止し、乱暴で残酷なアメリカ人やフイリップスの監督たちを苦しめた。拡大してゆく労働運動において注目すべきは、数企業間の行動の統一であり、農民大衆その他の労働者からうけた活潑な支持である。

闘争はまた、学校サークルでも行われた。この闘争は、高等教育でのヴィエトナム語の使用、授業内容の改革、授業料値下げ、法外な入学金の廃止等々、精力的に展開されている。休暇に入り、生徒が帰省すると、国中に愛国的勢力が興隆しているのを見るので、彼等は帰校すると尖鋭な解放戦線の宣伝者となるのである。例えば、グエン・バン・クエ院の小学生七、〇〇〇人のストと建物占拠とは全国を驚愕させた事件である。大学のサークル、その他の各種の知識分子のサークルは、愛国運動の三人の学生と共に死刑の宣告をうけたレ・クアン・ヴィン教授⁽²⁵⁾の勇敢な態度に奮起させられた。

民族ブルジョアジーは、合衆国の「商業化した」援助すなわちヴェトナム住民の当面の需要に応じない而もアメリカでは売れないアメリカ商品のヴェトナム向け輸出に対し、いよいよますます断乎として立ち上りつつある。このグループはまた、関税障壁を設けたり、気まぐれな安全保証税を制定したり、ヴェトナムの生産に損失を生ずる外国商品を大量に輸入したりすることにも抗議するようになった。また零細商人らは、主として、商売を圧迫する数多の租税や賦課金の廃止に立上った。華僑は強制登録に反対してデモを行い、北部出身のヴェトナム人で一九五四年に無理矢理に南部に疎開させられた者は、約束の手当とその郷里の村への帰還を要求して闘った。サイゴン郊外から来た五、〇〇〇人の労働者は、土地の取上げと勝手な立退き命令に反対して、強情で持続的な闘争を展開した。

弾圧に対する都市住民の抵抗が、しばしば、公然と過激な形態をとるにいたったことは強調する必要がある。アメリカ兵で、あたかも征服国にいるかのように振舞ったものたちは、街上であやまりを指摘された。兵士たちのうち最も傲慢な者に対しては、手榴弾攻撃があらこちらで行われた。

要するに、政治闘争は、鎮圧が再燃するにつれて、弱まるどころか、益々強大となりつつある。

今日、南ヴェトナムには二つの敵対の権力が存在するという否定し難い事実を招来した。一つはゴードイン・ディエムの政府で、それは都市と交通路線を抑えているだけであり、他の一つは南ヴェトナム解放民族戦線で、これは広大な農村地帯を掌握している。解放民族戦線は、都市とその郊外でも、合法、半合法の形態で人民の闘争を指導している。だから、ゴードイン・ディエムは、アメリカの大砲に守られる以外には、東の間も、解放民族戦線の抑えている地区に危険を冒して行くことができないのである。

B―武装闘争

政治闘争の自然の延長である武装自衛は、アメリカの軍事干渉のより強まる中で、ますます増大しつつある。戦場にアメリカ兵がいることは、ディエムが人民を偽瞞する最後の機会をとりぞくのである。なぜなら、誰でも自分の眼で、ディエムが奨励している外国の侵略を見ることが出来るからである。

解放戦線の指導は防禦戦を頗る効果的にしたので、最も頑固な主戦論者の頭にも疑問が起る。戦線武装隊の活動は通例次の二つの特徴的な形態をとる。すなわち一つは戦略的破壊行為であり、二つは、敵が一寸でも警戒を怠るところへはどこへでも敏速な襲撃をかけることを忘れずに、掃蕩作戦に対して人民を防衛することである。要するに、何処にでもいながら、いつも捕捉し難い尖鋭なゲリラ部隊は、それが全人民に支援されているので、最も現代的な戦争技術を嘲笑っている。

敵が住民を結集する大戦略手段は、蕾のうちに摘み切られる。命令をうけると直ぐ、当該地方の住民は、抗議集会を開き、請願書を送り、そして、あらゆる手段を用いて自分たちの小屋から移転されることに反対する。高原地帯では、全村がうちすてられ、住民は森林深く行き、そこに住みつく。捕えられたものは、僅かな油断にもつけないで集中営所から逃げ出す。

すべてやってみたにもかかわらず「戦略村」が設立されたところでは、戦線の闘争は、不服従から破壊行為にわたるより精力的な戦略形態で行われる。即ち、住居に放火したり、村の柵をとり壊したり、防禦装置をとり去ったり等々である。ディエム当局は「戦略村」を防衛するため大部隊を動員するのを不可能にさせられている。この戦略村は、恐らく、内部に情報をもっているゲリラ隊の襲撃に委される。フランス遠征軍の不運はアメリカ軍やその

傭兵の犠牲において再びはじまりつつある。部隊を散在させることは、ゲリラの襲撃を受け易くするが、部隊を市街に集結することは、地方を悉く戦線的手中にわたすと同じであろう。

一九六二年の前半六カ月間に、七〇〇設立された中の四〇〇の「戦略村」が破壊された。ベンチュイ州だけでも四月と五月のたった二カ月で、これらの村の四〇をとり除いた。ベン・チュオンの住民一、二〇〇人を容れる一つの戦略村に命令を伝達するのに、アメリカ司令部は、装甲車と大砲に援護された二つの特別選抜攻撃隊と二つの警戒団とを特派することを余儀なくされた。このような方法を用いても、ベンチュオン、ベンドソン及びベンヴァン（ツードーモ省）の三つの集中營の七、〇〇〇人の中、四、五四八人の住民は、広汎な「日の出」作戦⁽²⁶⁾の戦火をくぐって、どうにか逃げ出して郷里の村へ帰った。ジャディン省では、一九六二年四月一日から五月十日までに、四二の「戦略村」があますところなく破壊され、一八の他の再結集所が完全に焼き払われた。ビンディンでは四、〇〇〇の住民が「戦略村」設立命令に抗議してデモを行った。デモの間、ディエムの手先三七人がひどいめにあわされた。クアンナムでは、二つの施設が移され抗議集會が開かれた。このように、運動は迅速に一般化されるようになり、アメリカ人が多少とも信頼できると考えた地方においてさえ勝利しつつある。以上で分るように、ステレーの十八カ月間（一九六一年七月から六二年十二月まで）平定計画は、失敗に帰しつつあった。

南ヴェトナム住民は、徴兵制度に反対して成功しているが、このようにして、ディエム軍自体の強化を防ぐだけでなく、その重大な損失をも確認しつつある。

最も純粹なゲリラの伝統で闘われた決定的戦闘は、敵の隊伍を回復し難いほど手薄にしつつある。近代兵器に援護されたところでは、敵は全くめざましい攻撃をしかけるが、パルチザンは自然の中に消えてしまう。そこで、相

手が消えると苦悩がはじまる。彼等は戦う部隊をいらだたせ、そして復讐心から非戦闘員の大虐殺を行う。非戦闘員の大虐殺は確かにあらゆる同情の念を失わせ、憎悪をかきたて、彼等を人民の敵として、マークさせる。

サイゴンが続々と大掃蕩作戦を行った一九六二年の前半、戦線軍Ⅱ人民解放軍の軍事命令下にかちえた二、三の戦果について述べよう。同年四月一日、サイゴン郊外ホク・モンにおいて、ディエム掃蕩戦は百人以上と見積られる損失を蒙り、全司令部が捕虜とされて終わった。同四月五日には、アメリカ将校の指揮するディエムの中隊は、壊滅され、援軍が航空機で輸送された。カン・デュオックでは交戦中の二〇〇の兵の中、戦線は五八人を殺し、二六人を負傷させ、四七人を捕虜とした。すなわち、一三一人が戦闘から脱落したわけである。キエンフォン省では、五カ月間に一〇〇回の防禦戦が行われ、その期間に、ディエムの方は、三〇〇人が殺され、二六三人が負傷し、一四一人が捕虜となっている。

軍の護送隊を待ち伏せしたり襲撃したりすることは、更にいっそう有効である。六カ月間に、解放戦線は、軍用列車の襲撃を三四回組織し、その中注目すべきは、「雲の鞍」での待伏せで、五七〇人の特別選抜攻撃隊員を殺した。またビンチュアンでは六月四日に三つの護送隊襲撃その他が行われた。

他方、解放戦線は一二八の保置と衛兵所を占領してこれを破壊し、三四の橋梁を爆破し、何百キロもの鉄道と道路を使えなくした。一九六二年一月から五月末までに、戦線軍は三、五〇〇回交戦し、一〇、六九〇人の敵を殺傷し、一、六六八人を捕虜とした。(その中六一人のアメリカ人将校と兵士が殺され、またわ負傷させられ、六人が捕虜となった。)

装甲車も航空機もゲリラの攻撃を免れることはできなかった。数カ月の間に、三四の敵の航空機が撃墜され、ま

たは、ひどい損害をうけた。タンクや装甲車は甚大な敗北を喫した。一九六二年四月における「日の出」作戦の間に、二三台は、悉く地雷によって爆破され、その他の方法で破壊された。

一九六二年二月八日、ケネデー政府が、サイゴンにアメリカのヴェトナム軍援助司令部をおき、ハーキンス將軍の指揮下に米軍を直接投入して、数カ月に亘る大軍事作戦を展開した中で、南ヴェトナム全住民の支持するいわゆる「共産ゲリラ」は、減少するどころか、戦火に鍛えられてますます尖鋭となり、いよいよ強大となって行く。彼等の武器庫は、戦利品のおかげで、日毎に改善され、近代化して行く。

このようにして、アメリカ將軍たちの最上の計画は、行きづまっている。なぜなら、彼等の誰もが、彼等に決死の戦をいどんでいるのは南ヴェトナムの人民であること、また、断乎屈服しない全民族を奴隷化することは不可能であるという決定的な事実を考慮に入れないからである。

(註24) 前出 "The South Viet Nam Liberation National Front." p. p. 65—74.

(註25) Le Quang Vinh 教授は、一九六二年五月他の二十六名と共に特別軍事裁判に附せられた。告訴状には、知識人、学生、公務員や南ヴェトナム軍隊の兵士が、集会デモを組織したこと、強制徴兵に反対し、バックトゥー公園やビンロイ橋で青年、学生、知識人のデモを行ったこと、大学においてヴェトナム語で教育するよう要求したこと、卒業試験落第政策に反対したこと、受験費廃止を要求したこと、学生の強制徴兵に反対したこと、密偵網設置に反対したこと、チャン・パンオン烈士の記念集会を行ったこと、サイゴン労働者のデモを支持したこと、SEATO 反対運動を行い世界平和を支持したこと、反米世論を起したこと、アメリカ大使館やサイゴンの米兵に手榴弾を投げたこと等々をあげ、他のクーデター参加の被疑者一〇〇名(軍人) 余りの逮捕者と同様の罪状で、死刑を宣告された。一九六〇年十一月十一日、空挺部隊のグエンという陸軍大佐が指導する最初の武装クーデターに関連して、インテリゲンチヤに加えた弾圧である。次いで、六一年の十一月には空軍士官による大統領官邸の爆撃があった。

(註26) 「日の出作戦」とは、アメリカ帝国主義が南ヴェトナムで行っている特殊戦争に用いられる言葉である。中国のヴェトナム研究者はこれを日本帝国主義の中国で行った「三光政策」と同じような非人道的な政策とみている。「遊撃戦^{ゲリラ}をおさえる新しい方法」で、米帝が過去に行っていたいわゆる「報復手段」や「掃蕩作戦」が失敗したので、農村に「戦略村」を作りいわゆる「軍事安全制度」という名目で農民を強制的にこの集中營に狩り込み、農民と遊撃隊とを隔離し、遊撃隊のかくれ場所と食物をなくすことによつて、弾圧をはかるうといふのである。ニューヨーク・タイムズによれば、この計画は三つの段階からなつてゐる。第一の段階は、人民の闘争をやめさせるため三カ月にわたつて森林山岳地帯を討伐するため兵力が動員される。第二段階で心理戦争をはじめ人民をなだめたり、誘惑したりするためヴェトナムの秘密警察が派遣される。第三段階は、アメリカカイディエム一派が現在人民の支配下にある諸地域における自己の行政機関を再樹立するのである。若干の地域では第一段階が第二、第三の段階の一部とともに実施される。アメリカは各一、五〇〇名の人々を「戦略村」に集結させるためにカイディエムに財政的援助(四億ドル)を与えるといふものである。

む す び

南ヴェトナム解放民族戦線は、カイディエム政府の独裁的で裏切の政策に対して、国を愛している全人民を包含し闘争する地方の政治組織である。創立一カ年にして、此の戦線は、その陣營にカトリック信者、自由主義思想家、ブルジョア、プロレタリア、都会人、地方人、筋肉労働者も頭脳労働者も受容れた。カン博士や、法律家グエン・フリート、グオン・チ・チュウ教授や、劇作家チャン・ヒュー・チャン、国際法学者グエン・ヴァン・ヒュー、建築家フニン・タン・ファットのような多数の有名人がこの戦線に加盟した。戦線の目標は、ワシントンやサイゴンが声明したような「共産主義制度」を樹立するのではなく、合衆国の干渉とカイディエムの独裁制に対して闘うことであつた。

一九六一年十二月二十日の創立一周年記念日に、南ヴェトナム解放戦線は、世界中の人民政府や世界平和評議会やアジア・アフリカ連帯委員会や、ヴェトナム国際監視委員会にその目標を明示する覚え書を送った。此の目標は、外国によって教唆され、または転覆精神によって促されたものとは云われぬ。それどころではなく、それはヴェトナム人民の大きな政治的成熟を立証するものであった。

南ヴェトナム解放民族戦線はまた、「若し、合衆国IIディエムの一派がしぶとくて、現在の血なまぐさい制度を維持するなら、南ヴェトナムの人民は、南ヴェトナム解放民族戦線の指導の下に、南ヴェトナムに、すべての政治的傾向とすべての社会階層を正しく代表する独立・民主の権力を樹立するため努力と決意を集中し、平和・中立の外交政策を追求するであろう」と述べている通り、合衆国が南ヴェトナム人民の大意願を蹂躪しつつけるであろう可能性をも心にとめている。

「若しアメリカ帝国主義者たちが、彼等の武装力を用いて南ヴェトナムを侵略するような頑迷な保守主義者であるなら、南ヴェトナムの一、四〇〇万の人民は、直ちに、彼等に対してあらゆる適当な手段に訴えるであろう。すなわち、南ヴェトナム人民は、あくまでたたかい、必要とあれば、友好諸国の人民と政府に物質的援助を要請し、侵略者たちを国外へ追い払うであろう。」

だから、現在、南ヴェトナム人民によって展開されている闘争は、植民地主義打破の一般的運動に含まれるだけではなく、戦争に反対する人類の闘争の一部となるのである。特殊的には、合衆国が東南アジアで点火を目論み、南ヴェトナムで開始しているいわゆる「限定戦争」に反対する東南アジア人民の闘争の一部なのである。

南ヴェトナムへ合衆国軍隊を投入することを陰蔽しようと、ホワイトハウスが行った一切の議論は、アメリカ

帝国主義者の追求する戦争政策が、東南アジアで鞏固な軍事基地を手に入れることが必要であったという眞実をみけすことができない。合衆国の帝国主義的性格が、戦争政策を刺戟して南ヴェトナムを植民地としたのである。だから、長期にわたる反共産主義の布告は、彼等の低開発諸国に与えた援助についての宣伝と同様に、偽瞞である。

帝国主義者にとって、南ヴェトナムの要塞は速急に強化される必要がある。スターレー計画によって「平定」させる必要がある。ワシントンは、南ヴェトナムの主人公となることよってのみ、此の干渉をラオスに延長して中立政府の樹立を妨害することができるのだ。南ヴェトナムの基地、特に、十七度線近くの海岸と高原から、ラオスのノサバン一派の救援に、ディエムの軍隊、必要とあれば米軍を派遣することは合衆国にとって容易である。ラオスは東の南ヴェトナムと西のタイランドとの間の「サンドイッチ」であろう。アメリカ帝国主義は、この二つの力が、英雄的ラオス人民の独立と中立の決意を打砕くことを希望する。

これは第一歩に過ぎない。若しラオスがアメリカ帝国主義の手に落ちたら、カンボジヤはがっちり取囲まれる。そうなるとこの勇敢な国にとって合衆国の衛星国との戦争を避けることが困難となるであろう。

このようにして、ペンタゴンの貪慾が満たされたら、合衆国は全東アジアの諸国を直接、脅威することが出来る。合衆国のこの夢は、東北アジアをも含めている。一九六一年末、軍事「防衛」ブロック——東北アジア条約機構（NEATO）設定の準備が急がれた。日本、南朝鮮、台湾がそのメンバーである。日本からパキスタンまで連続する基地のベルトをもって、合衆国は社会主義ブロックのアジア諸国——とりわけ人民中国——を取囲むことが出来るであろう。それはCENTOとNATOと共に、未来の核戦争の中距離ロケットに用いることができるであ

ろう。

だから、南ヴェトナム解放戦線は、このようなアメリカ帝国主義の野望を打碎き民族自決の権利を守り、そのことによって、戦争拡大の危険を喰いとめるために血を流しているのである。正義と権利とは南ヴェトナム人民の側にある。

アメリカの南ヴェトナムへの軍事干渉は、いま南ヴェトナム解放民族戦線の指導下に闘争——正義と平和を守る——を行っている南ヴェトナム人民の力強い抵抗によってはね返えされている。南ヴェトナム解放民族戦線の闘争は、全世界の与論に支持されている。

社会主義諸国——特にソビエト連邦と中国——は、南ヴェトナムにおける合衆国の行動に警告し、大多数の中立諸国は合衆国の行動を非難した。多数の国際団体と、各国の大衆団体は南ヴェトナム人の闘争を支持した。これらの組織には、世界労働組合連盟、国際民主青年連盟、国際学生連盟、国際民主法律家連盟、アジア・アフリカ作家協会、世界平和評議会等々がある。合衆国の奸計は資本主義諸国でさえも非難されている。

追記 最近のトンキン湾事件は、南ヴェトナム解放民族戦線とアメリカ帝国主義との対立、既に一九六一年から開始されているアメリカ帝国主義の「宣戦布告なき戦争」——汚ない戦争の延長と解釈することによって、その本質を把握することができる。

本稿は、資料の関係で一九五四——六二年までの南ヴェトナムの対立の局面とその発展の様相を描き出すにとどめたが、本稿がトンキン湾事件の正しい理解とその上に立ってのわれわれの態度決定に些かでも役立てば幸いである。